

## 日本語速記法の成り立ちと類型

### ～過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究～（一）

兼子次生、菅原登、下谷政弘

速記科学研究会

#### 第一編 速記の起源と近代速記方式の発達

（はじめに）

「速記」は、古代からさまざまなニーズに応じて、生まれ消え去る言葉を固定するための手段として、いろいろな方法が生み出されてきた。言うまでもなく、速記はその符号そのものに社会的価値があるというよりも、そこから作成された文字記録の方に価値があるものと考えられてきた。しかし、研究課題によっては、記号や符号が書かれた速記原本<sup>1</sup>、文字化された速記録<sup>2</sup>を新たな視点から解釈することが必要となるケースがある。あるいは、残された速記録を見直すことによって、かつての発言事実を改めて精査したり、未反訳のままに放置された重要な速記原本を改めて解読することが重要となる場合がある。

かつて速記録を作成する作業においては、これまで一義的に文字化された速記録こそが重要であり、そのための手段は正確さと経済性が妥当であればよいと考えられてきた。また、速記には多様な方式が存在し、速記者たちは方式が違えば、互いに解読は困難となる。また方式の相違だけでなく、同一速記者であっても、いつも完全に同じ速記符号を書くとも限らない。そのため、速記原本、速記録を各種の事実関係の証拠として保存するという考え方は今日まで存在しなかった。速記原本を第三者反訳し直すという行為は今日まで想像もされなかったのである。

しかし、速記符号は、音声言語と文字言語の中間に位置し、その言語の音声規則に適応して、文法的にも、また時事用語など語彙的にも、その対象とする言語の時代的特徴に合わせて理論体系が組み立てられてきている。したがって同一方式の速記者であるならば、同世代の速記者たちはほぼ同種類の符号を筆記しているものと考えられ、残されている重要な速記録を解読できる可能性が高まる。

そこで、系統的に発達してきた速記理論を相互に関連づけながら、どのように速記符号が速記原本に筆記されているか、その内容を明らかにすることによって、書き手と読み手が速記符号を共有できる可能性がより高まるものと期待される。今後、残された速記録の解読作業に貢献できるよう、まずは速記という文字文化が世界でどのように誕生して、どのような筆記理論を開拓してきたかを明らかにした上で、それらが日本語速記法にまで及んできたプロセスを理解することを試みたい。

## 速記の起源と近代速記方式の完成

～文字のもとで発達してきた手書き速記の本質～

### 1. 速記の起源と近代速記の発達

速記以前に、文字が自然発生ののちにつくり出した現象を見よう。古代シュメールにおいて象形文字から進んだ楔形文字は粘土板に刻まれた字体であった。また、紀元前 4000 年ごろ生まれた古代エジプトにおけるヒエログリフ（聖刻文字）は、石に刻まれ壁面に描かれる象形文字から、紀元前 1900 年ごろ日常の用途で葦のペンとパピルスの書字材料を用いながらヒエラティック、デモティックへと変化し、図 1 のように書体の速記化現象が認められる。

|       | ヒエログリフ        |               |               |      |             | ヒエラティック |      |     | デモティック      |
|-------|---------------|---------------|---------------|------|-------------|---------|------|-----|-------------|
| 毛皮腰巻  |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| むち    |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| もり    |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| 手 斧   |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| つ ぼ   |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| 矢 立 て |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| 巻 物   |               |               |               |      |             |         |      |     |             |
| B.C   | 2700<br>~2600 | 2500<br>~2400 | 2000<br>~1800 | 1500 | 500<br>~100 | 1900    | 1300 | 200 | 400<br>~100 |

図 1 エジプト象形文字の速記化現象 加藤一朗  
象形文字入門 1970 年版から兼子次生作成

文字は権力の象徴と実用という 2 つの側面を備えている。実用を求める文字は機能の拡張を図り、手書き速記は機能性の人工文字としてつぼみを膨らませていくことになる。

ハム語のエジプト文字はシナイ文字、カナン文字へと伝わり、一方セム語族のフェニキア人は地中海交易における取引等の記録のために、22 の子音から成り立ち、右から左へ横書

きするフェニキア文字を広めた。

紀元前 1000 年ごろのギリシャ人は、フェニキア文字から自国語の表音文字をつくろうとしたところ、ギリシャ語を表音的に書き取るために不足している母音文字を追加したり、発音に適した子音文字を求めて変更を繰り返した。今日使用される”BC”(Before Christ)、“AD”(Anno Domini、西暦)などのような略語をつくり出して、表語機能を高めた。

その時代、ギリシャ人はみずから執筆に用いるほか、幅広く集会での発言を書き取る用途に適した筆記法を求めていた。ここに図 2 のように、原始的な速記様の早書き法の発生をもたらすことになる。

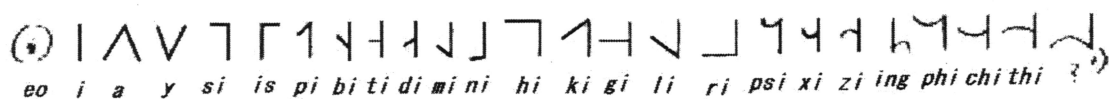


図 2 古代ギリシャの略記法

C.Johnen:Allgemeine Geschichte der Kurzschrift,1940,Berlin,p.15

ギリシャ人は、みずからが著述する道具という目的に加えて、講演や吟詠される詩歌のように速度を伴う言葉を書きとめるという、それまでに見られなかった文字の用途拡大を目指し、図 3 のように文字の改変を繰り返した。ヘーゲル Fritz Haeger は、原始的なギリシャの速記様の早書き文字が書字用蠟版に断片的に残されていると書いている。また、バスチャン、W.T. J. Bastiaan の「速記の起源」(小堀四郎抄訳)にはパピルスに書かれた古代ギリシャ語の速記が残されていると記されている。<sup>3</sup>

| フェニキア文字 | 発音               | A | B | G | D | E | EN | V | F | Z | CH | EN | TH | Y | I | K | L | M | N | S | X | A | P | T | Q | R | SH | T | U | PH | CH | PS | O | C | H |   |
|---------|------------------|---|---|---|---|---|----|---|---|---|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|----|----|---|---|---|---|
|         |                  | K | g | h | a | . | ay |   | j | h | o  | z  |    | y | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7  | 7 | 7 | 7  | 7  | 7  | 7 | 7 | 7 | 7 |
|         | CHIRE            | K | g | h | a | . | ay |   | j | h | o  | z  |    | y | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7  | 7 | 7 | 7  | 7  | 7  | 7 | 7 | 7 | 7 |
|         | SIDON            | K | g | h | a | . | ay |   | j | h | o  | z  |    | y | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | o | 7 | 7 | 7 | 7 | 7  | 7 | 7 | 7  | 7  | 7  | 7 | 7 | 7 | 7 |
| ギリシャ文字  | TERRA (BC800)    | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |
|         | ATHENS (BC400)   | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |
|         | COLONIES (BC800) | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |
|         |                  | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |
| ティロの速記  |                  | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |
|         |                  | A | B | C | D | E |    | F | G | H | I  | J  | K  | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y  | Z |   |    |    |    |   |   |   |   |

図 3 古代表音文字とティロの速記の表音文字 兼子次生成成

ヘーゲルは「Geschichte der Kurzschrift」の中で「アクロポリスやデルポイで発見された碑文に見られる速記文字様のものは、原始的な段階の早書き法であるが、筆記速度の点で速記の用途には達していない」と指摘し、メンツ Arthur Mentz らが「速記」であると説いた説を否定した。すなわち、速記文字様のものは、普通に筆記する文字を変更する目的でもなく、文字と隣り合って、文字改革、早書き法の両方の試みとして、共に生まれた、とする。そして「ギリシャで現れた速記の萌芽は、ローマにおけるラテン語のティロの速記 Tironian

notes において完成された」と書いている。<sup>4</sup>

古代の速記は、タキグラフィ “Tachygraphy” と呼ばれ、複数の文字を表す文字や言葉を表す略語を用いていた。1588 年、イギリスにおいて速記ルネサンスが興ったとき、「ティロの速記」は、ブライト Timothe Bright に “Characterie” と名づけられた、英文速記として復活した。

| 基礎記号   | A | B | C | D | E | F | G | H | I | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | X | Z |
|--------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 初期ラテン  | ア | B | < | D | E |   |   | H |   | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | X |   |
| ティロの速記 | h | 3 | C | d | e | f | g |   | i | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | x | z |

1. 速記記号のつくり方とつづり方  
 (1)文字をそのまま使う  
 (2)スペルの一部で略語をつくる  
 なんと (Ut) V ついたち (Kalendae) < 別に (sed) S 卓越 (majestas) M 親しい (amicus) h 私に (mi) M 真理 (veritas) ~ 円 (circulus) / それというのは (quia) A アレクサンドロス (Alexander) h 罰金 (multa) h 描写する (descripsit) f 記録する (subscripsit) S

2. 接頭辞  
 (例) ab \ ad / an < con ) de f e — in | — nec z per / prae | pro 7  
 s(u) b / trans 7 non ~

3. 「よい」を例に語尾変化  
 bon-i z -o z -um z -e z -a z am z -orum z -is z -os z -arum z -as z

4. 文例  
 Quo usque tandem abutere, Catilina, patientia nostra?  
 「いったいどこまで、カティリーナよ、われわれの忍耐につけ込むつもりだ」  
 QPN z Q / P / N z (作成・兼子次生)

図 4 ティロの速記の構成

ラテン語において、書字材料は蝋版と鉄製スタイラスが用いられ、その組み合わせに適した筆記体が発達し、古代ギリシャの恩恵を受けて「ティロの速記」が人為的に完成されたと説明される。奴隷の子として生まれたティロ M. T. Tiro は、キケロ家で幼いころから家族のように育てられて、主人の政治家 キケロ Marcus Tullius Cicero とともに、「ティロの速記」を完成したと言われる。図 4 の最下行のように、ティロが、元老院で謀反の陰謀を暴露されたカチリナ弾劾演説の冒頭を “QPN” と書いたことは、最古の速記実務のエビデンスとされる。発言を想起させる頭文字を取り出して書く頭字法は “RSVP” (répondez s’ il vous plaît、ご返事ください) などの形で現代に伝わっている。ギリシャやローマの古代速記は、のちにヨーネン Christian Johnen らによって速記法体系の解明と解説が行われた。



一方、固有文字を持ったエジプト、メソポタミア、インダス、中国の古代文明において速記は発生しなかったし、手書き文字であるエジプトのデモティック、中国の草書体など筆記体が符号速記へ進化する例がなかったことは、興味深い現象である。もっとも、日中戦争後、中国で速記方式の研究が百花斉放の時代を迎えたころ、草書の一部をとって固有の速記法を考案する者も出現した。

製紙の工業化が到来するまで、速記符号を書くために高価な紙を大量に用いることはなく、用紙は主に文字化、つまり反訳するために使用された。

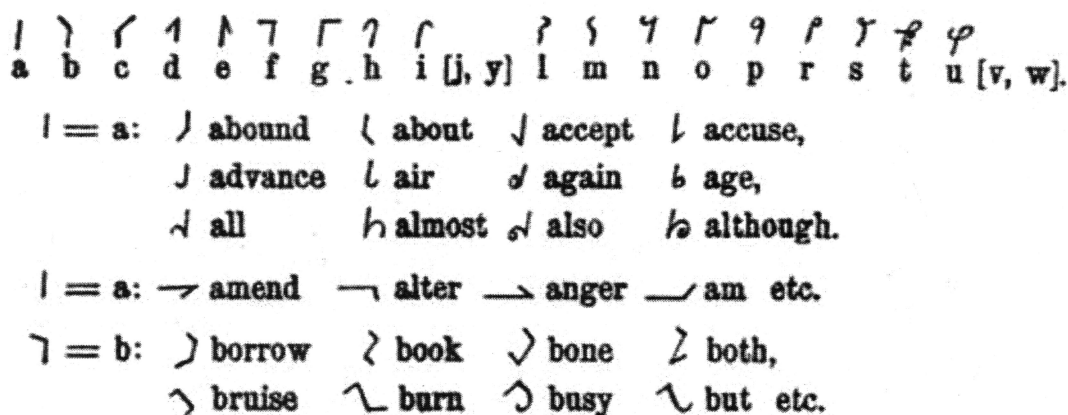


図 5 ブライト式の基礎符号 T.Bright,1588 A.Navarre : Stenographie

中世、ブライト Timothe Bright が著した初の速記書「キャラクター」" Characterie" に始まる速記ルネサンス期には、羽根ペンと洋紙が用いられており、図 5 のように規範となる基礎符号に縦直線を充て、その頭部や尾部に破片と呼ぶ短線、フック、円をつけて音素符号をつくった。連続のためには直線を横にする工夫が凝らされた。ブライトは著書をエリザベス一世女王へ献上し、英国議会は速記考案の功績を認めてブライトへ 15 年間にわたる速記を教授する独占的な権利を与えた。これが速記界における最初の知的財産権である。

ブライトはフランス留学中、キリスト教会で、日常使用されなくなったラテン語のティロの速記を発見したのをきっかけに、その仕組みを解明し、英語に応用したいと考えたことが速記法創案の動機であったとされる。英文速記法は一説によれば、1175 年のティルベリーのジョンに遡るとの説があるものの、速記ではないという説もあり、定かではない。<sup>5</sup>

言葉を発音に忠実に固定していく表音主義は、1602 年、ウィリス Jhon Willis に始ま

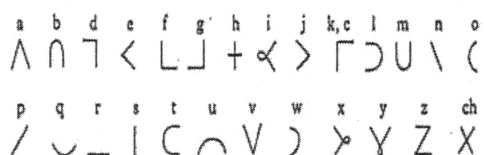


図 6 ウィリス式の基礎符号

る。彼は図 6 のように、ラテンアルファベットに対応する表音式基礎符号として、一部にアルファベットを残しながらも、子音と、頭につく初音の母音に対して幾何的な図形、またはその一部分を充てる原則を採用したウィリス式を公にし

加点母音 子音と母音のつづり方

|     |     |      |       |       |
|-----|-----|------|-------|-------|
| i   | o   | u    | æ     | ɑ     |
| dog | sad | sell | purse | spend |
| bad |     |      |       |       |
| red | lie | lay  | sea   | do    |
| roe | rye |      |       |       |

略語

|     |      |       |      |
|-----|------|-------|------|
| if  | and  | much  | mind |
| sun | moon | heart |      |

図 7 ウイリス式の加点母音と用法、象形的略語の一部

ウイリス式はその体系をステノグラフィ Stenography と名づけたが、今日ではそれは「速記」を意味する世界共通語となっている。

1626年にはシェルトン Thomas Shelton が、図8のようにウイリス式を改良したシェルトン式を公にした。この方式は、図9の、ピープス Samuel Pepys の「ピープス氏の日記」で知られるが、ニュートン Isaac Newton が用いたと伝えられ、速記はインテリゲンチアのリテラシーと呼ばれる時代を築いた。「ピープス氏の日記」はのちにスミスによって解読され、速記原本の第三者解読（反訳）の偉大な成功事例となった。

音素単位に速記符号を書いていく英文速記法では、子音が重要な要素として幾何的な線条を配分される一方、母音の扱いが速記研究者の関心であった。初音の母音は書かれるものの、2音目以降は書かれなかったりしたが、子音符号を置いた位置で母音を含ませる表象法



図 8 シェルトン式の基礎符号と表紙  
A.Navarre:Stenographie,p.85

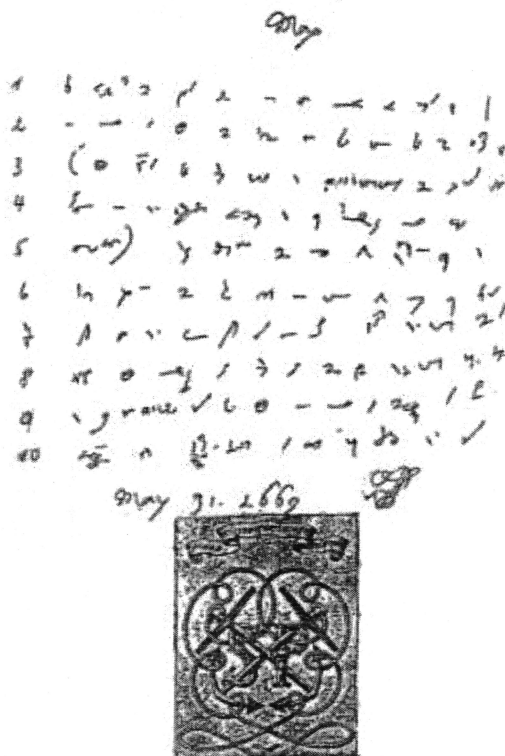


図 9 ピープス氏の日記の最終ページ  
H.Jochems 氏提供

ており、幾何派の父と呼ばれる。

また、図7のように、二音目以降に出現する母音には子音の周囲の位置に点を打つことによってあらわす加点母音法を用いた。

の萌芽があらわれた。

1684年、コールズ Elisha Coles は ” A “を上段に書けば、aid、and、age、arch、ash、ark、askを表すとし、置かれた段で子音に伴う母音を示す三段法の略記法を創案した。<sup>6,7</sup>

その着想は、1672年、メーソン William Mason において、子音に続く母音が [a]、[e] の場合は上段に置き、[i]、[y] は中段に置いて、そして [o]、[u] は下段で表す方法に見られていた。<sup>8</sup>

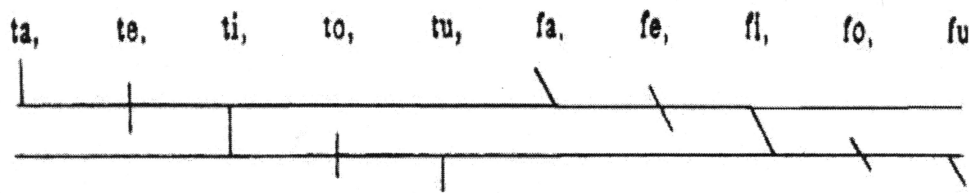


図 10 モート式の母音表象法 A.Navarre:Stenographie,Paris,p.77

また、1833年、モート Thomas Moat は、“The Shorthand Standard Attempted”を出版し、その中で五線譜のような5段を設けて、同じ形の線が、高さで決められた母音を含んで違って読まれるという方法を考え出した。図10のように、一番上の行は[a]、次の行は[e]、その下の行は[i]、4行目は[o]、一番下の5行目は[u]を表すとした。五線譜のような罫線を用いて、母音を省くために子音を置く位置で表すという表記法は、文字にない発想であった。<sup>9</sup>

この発想を子音に適用する研究は、フランスのルフェーヴル Lefevre が1872年に三線譜で9種の子音を表象する理論を完成した。最上段を①b、pとし、次から②d、t、③g、k、④j、ch、⑤l、ill、⑥n、gn、⑦r、f、⑧z、s、⑨r、mの16種の子音を含ませるというものであった。

この手法は、速記線の筆記量を減らす目的で研究が進んでいき、のちにドイツ語の草書派速記法の多くの方式に採り入れられたほか、クロス式など幾何派の方式にも、母音を段で示す表象理論として組み込まれていくことになる。

|        | 1753 |
|--------|------|
| a      | /    |
| b      | 1    |
| c      | く    |
| d      | \    |
| e      | ✓    |
| f      | ノ    |
| g      | フ    |
| h      | L    |
| i      | /    |
| j      | ノ✓   |
| k      | く    |
| l      | く    |
| m      | ノ    |
| n      | -    |
| o      | ノ    |
| p      | く    |
| q      | q    |
| r      | γ    |
| s      | /o   |
| t      |      |
| u      | L    |
| v      | ^    |
| w      | ^    |
| x      | x    |
| y      | く    |
| z      | /    |
| GURNEY |      |

図 11 ガーニー式

|       | 1767 |
|-------|------|
| a     | .    |
| b     | ノノ   |
| c     | く    |
| d     | く    |
| e     | .    |
| f     | \    |
| g     | く    |
| h     | q d  |
| i     | .    |
| j     | q d  |
| k     | く    |
| l     | ノノノ  |
| m     | く    |
| n     | く    |
| o     | .    |
| p     | ノ    |
| q     | q    |
| r     | /    |
| s     | -    |
| t     |      |
| u     | .    |
| v     | \    |
| w     | ノノ   |
| x     | ノノ   |
| y     | ノ    |
| z     | -    |
| BYROM |      |

図 13 バイロム式

メーソン式は優れた方式であったが、単語の略符号が 4, 800 にもふえて学習上の負担が増した。そこで、1750 年、ガーニー Thomas Gurney はメーソン式を改良して、図 11 のようなガーニー式を創案し、略語を 100 程度に減らした。彼は、速記事務所を設立して裁判所と英国議会の速記を長く行うこととなった。ディケンズ Charles Dickens は若いころ「議会の鏡新聞」の議会記者としてガーニー式で国会の討論を速記していたが、休会中の暇な時間に書いた小説「ピクウィック・クラブ遺文録」で成功し、一躍有名になった。<sup>10</sup>



図 12 幾何派(正円)の四分円と方角

バイロム John Byrom は 1720 年、正円を 4 つに分割した四分円(図 12) から切り出した幾何画線を音素に割り当てて基礎符号を生成した。それらは図 13 のように、単線と頭部に小円がついたものの 2 種類があり、母音は子音画線の前に着くものと、後ろに着くものとを書き分け、それら 5 母音を加点点であらわす表記体系を構築した。これをきっかけに幾何派が優勢に進化する。<sup>11</sup>

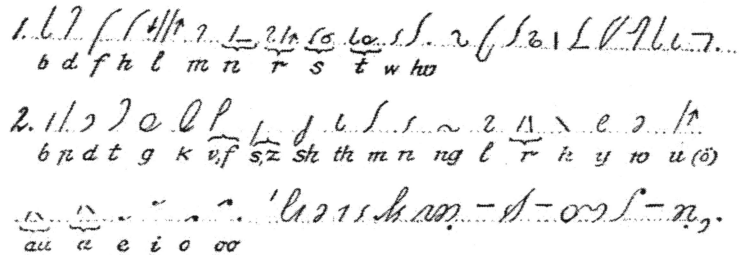
バイロム式の改良を活かしてテーラー Samuel Taylor は、1786 年、図 14 の正円幾何派のテーラー式を創案した。その中で、語尾の -ious、-able、-full、-ness、-ward など、よく使われる略語を設けたり、頻出度が高い単語の略語を多く整えて実用性を高めた。テーラー式のこの手法は、のちのピットマン式、グレッグ式、ステノタイプ(機械速記法)などへ継承された。

英国で完成された幾何派は、ブライトの速記を創発したフランス語へ逆流し、母音を小円、フック(丸カギ)、短線などで連続する方法を発達させていくことになる。

|   |      |
|---|------|
|   | 1786 |
| a | .    |
| b | e    |
| c | 2    |
| d | /    |
| e | .    |
| f | 2    |
| g | 2    |
| h | 2    |
| i | .    |
| j | 2    |
| k | 2    |
| l | 2    |
| m | 2    |
| n | 2    |
| o | 2    |
| p | 2    |
| q | 2    |
| r | 2    |
| s | 2    |
| t | 2    |
| u | 2    |
| v | 2    |
| w | 2    |
| x | 2    |
| y | 2    |
| z | 2    |

図 14 テーラー式

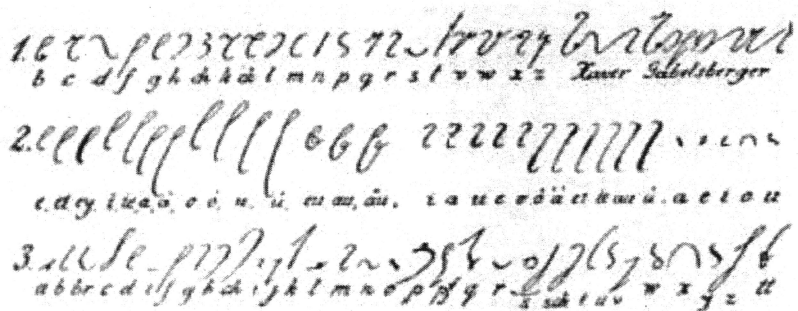
一方、ボードリー Simon Bordley が 1789 年、草書派の嚆矢となる図 15 の 1 のボードリー式を創案し、さらに 1802 年、ロー Richard Roe による図 15 の 2 のロー式が成立した。草書派はラテン文字の筆記体の動きに着目し、画数が多いが自然に書ける速記符号を用いて、速記書で示される規範符号と、実際に書かれた動態符号とのずれを改善する理論を構築できる可能性があった。



1. Bordley (1789): Einige Mitlautzeichen mit Nebenzeichen bei l, n, r, s, t. Als Beispiel der Anfang des „Vater unser“ (§ 1<sup>a</sup>); Umschrift: r (nach links geneigt), ftr (f + t verschmolzen mit Aufstrich-r) hv (= wich) rt n (steil) hvn, hl-wd B T nm. 2. Roe (1802): Alphabet (p, t, k werden gewöhnlich wie b, d, g geschrieben). Als Beispiel der Anfang des „Vater unser“ (§ 1<sup>a</sup>); Umschrift: R fthr (f + th verschmolzen) W ar N evn alwd BE (Punkt unter der Zeile) THY nm, THY kngd' OM, THY wl BE (Punkt) d (verkürztes d unter der Zeile).

図 15 最初の草書派，ボードリー式(1)と第 2 号のロー式(2)

C.Johnen: Allgemeine Geschichte der Kurzschrift, p.48



ガベルスベルガー式速記法における1817年3月の最古のアルファベットが1, 2では/d/と/m/では子音符号との関係において母音を表象し3で結論として1818年初の符号となった。のちに1818年5月、基本的に/k/p/q/と/o/と/r/の符号を交換した。

図 16 ガベルスベルガー式の符号の変遷

C.Johnen: Allgemeine Geschichte der Kurzschrift, 1940, Berlin, p.82

イギリスの幾何派方式はドイツ語圏へ早くから伝わっていたが、ドイツ語への適応が進まなかった。造語法の違いで、言葉の綴りがドイツ語では長くなる傾向があり、文字列が短い英語の速記理論を適用するとうまくいかなかったことなどがその理由とされる。1834 年、

ドイツのガベルスベルガー Franz Xaver Gabelsberger がラテン文字の筆記体から基礎符号を設定した、図 16 の 1 の草書派理論のガベルスベルガー式を完成し、ドイツから世界じゅうへ広がっていった。<sup>12</sup>

|    | I.Pitman<br>1837. | I.Pitman<br>1840. | B.Pitman<br>1855. | Graham<br>1858. | I.Pitman<br>1871. |
|----|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|-------------------|
| A  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| B  | /                 | \                 | \                 | \               | \                 |
| C  |                   |                   |                   |                 |                   |
| D  |                   |                   |                   |                 |                   |
| E  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| F  | \                 | \                 | \                 | \               | \                 |
| G  | —                 | —                 | —                 | —               | —                 |
| H  | ✓                 | [ ] (             | ✓                 | ✓               | ✓                 |
| I  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| J  | \                 | /                 | /                 | /               | /                 |
| K  | —                 | —                 | —                 | —               | —                 |
| L  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| M  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| N  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| O  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| P  | /                 | \                 | \                 | \               | \                 |
| Q  |                   |                   |                   |                 |                   |
| R  | ✓                 | ✓                 | ✓                 | ✓               | ✓                 |
| S  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| T  |                   |                   |                   |                 |                   |
| U  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| V  | \                 | \                 | \                 | \               | \                 |
| W  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| X  | ✓                 | ✓                 | ✓                 | ✓               | ✓                 |
| Y  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| Z  | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| Ch | \                 | /                 | /                 | /               | /                 |
| Sh | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |
| Th | ⌒                 | ⌒                 | ⌒                 | ⌒               | ⌒                 |

図 17 ピットマン式系の符号変遷  
I.Pitman :

こうしてイギリスにおいて幾何派、草書派、後述する半草書派がすべて創案され、符号速記が世界中の異言語へも広がっていった。

近代速記法の頂点に立つ方式は、長くピットマン式であった。ピットマン Isaac Pitman (1813. 1. 4-1897. 1. 22) は、修得したテーラー式を参照しながら、1837 年にピットマン式を完成し、表音主義による綴り字改革運動へつながる始点として” Phonography” と命名した。ピットマンは英語の音声を正確に音素表記する理想の実現に一生を捧げたが、速記の用法については個人型、ビジネス秘書型、高速度逐語記録型の 3 種に分けて、速記理論を体系づけた。

図 17 の主なバージョンの符号文例を見ると、速記符号は一般的に少画化と簡易化が意識されてきた。

ピットマン式を学んだグレイアム Andrew. J. Graham は、充実した専門語彙、ハンドブック、辞書を整備してアメリカ市場を開拓していた。

ピットマン兄弟は、アメリカ市場が成長期に入ったと見て、1855 年ベン版(図 17 の中央列)を発表してベンが渡米し、参入を開始した。

これに対してグレイアムは、ピットマンの許可を得ないでピットマン式を引用した出版物に、師の名を一切書かずに出版したと言われる。<sup>13</sup>

1872 年、米人工学士、カーライル R. G. Carlyle が田鎖に頼まれてアメリカから方式書を取り寄せたときに、ピットマン式は含まれなかったことは、このような事情が影響した可能性がある。田鎖の速記理論の構築と翻案研究がこうした経緯で進め



られたことになる。

武田千代三郎はイギリスからピットマン式の方式書を取り寄せて研究し、また、ガントレット E. Gauntlet がピットマン式を日本語に応用してガントレット式を創案する際には、みずからアイザックの許しを得て開発した。初めに英語版が出版され、のちに日本語版が書かれ、日本国内で販売された。

一方、1864 年、リンズレー David. Philip. Lindsley が英文速記のリンズレー式<sup>15</sup>を創案し、その後黒岩大らによって日本語に応用、翻案されて最初の速記書が出版された。1896 年、中国語初の傳音快字を創案した蔡錫勇はその基礎符号がグレイハム式由来とわかるのに黒岩と同じようにリンズレー式を参照して考案したと書いたが、日本語速記法の成立時に、当時の世界の速記事情がどう関係したかが、これまで明らかにされてこなかった。これらは、文明開化期の日本語の状況を見る上で興味深い側面である。

|                                                                                                                                                                                                                             | Pitman's | Shorthand | changes | with the times |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|-----------|---------|----------------|
| ① 1837 Stenographic Sound-Hand<br>The symbols representing both consonants and vowels were the same as now but were allocated differently.                                                                                  |          |           |         |                |
| ② 1840 Phonography 2nd Edition<br>In this the first revision, the consonants became as we know them today. This was the edition called "the penny plate" which formed the first correspondence course in the world.         |          |           |         |                |
| ③ 1857 Phonography 10th Edition<br>This edition is important because the representation of the vowels was changed to what we use today.                                                                                     |          |           |         |                |
| ④ 1922 The New Era Edition<br>This edition containing devices particularly for the high speed reporters. Speed of 250 words per minute for ten minutes were achieved under examination conditions.                          |          |           |         |                |
| ⑤ 1975 Pitman 2000 Edition<br>This is a modified version of Pitman New Era, with a number of the less important rules removed thus making for a lighter learning load but providing adequate speeds for modern office work. |          |           |         |                |

図 18 ピットマン式の変遷表 As fast as speech, Pitman Publishing Ltd, p.21.

19 世紀は幾何派全盛の世紀であった。幾何派の頂点に立つピットマン式系では基礎符号の子音は四分円から取り出した画線とし、母音は子音の周辺位置に加点する表記を原則としてきた。

しかし、ピットマン式は、静態の幾何図形を規範符号としたために生じた、現実にかかれる動態符号とのずれの解決という大きな問題を学習者の側に任せてきた観があり、実際ピットマンの関心は英語の綴り字改革のほうへ向いていった。無理な線の連続は、符号のくずれを生じて正しく読めなくなるリスクや学習性の低下につながり、速記の永遠の課題の一つであるが、発言速度が速くなるのに伴って、動態符号理論に着目する研究者が台頭する。

もう一つの課題には同音語（類音語）の処理がある。これらが日本語の場合、速記法を実用化し、あるいは高速度の逐語型速記法として改良する上で、また学びやすくするために、符号研究者に課せられたテーマであり続けている。

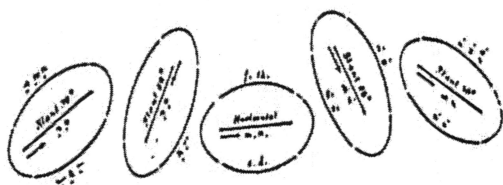


図 20 クロス式の符号源図

ピットマン式系の流れを受けて、クロス J. G. Cross は 1878 年、図 20 の楕円符号生成のダイアグラムを設定し、図 19 の基礎符号を正円に加えて幾何的な楕円から構成した、「折衷式速記法」 Eclectic Shorthand を出版し、幾何派の完成度を高めた省画化の符号イメージのクロス式を完成した。<sup>16</sup>

クロスは、母音を暗に示すために五線譜のように五段を用いて、最上段は [a]、[au]、[aw]、二段目は [e]、[eu]、[ew]、三段目（中心線）は [i]、[y]、[oi]、[oy]、四段目は [o]、[ou]、[ow]、五段目は [u]、[oo]、[oo] の母音を示す位置とした。また、速記符号の線長を 6 種にふやして、素材資源を豊かにした。ただ、これは反面、速記符号群の違いを瞬時に見分けさせる示差性を低下させたことは否めなかった。

アイルランド出身のグレッグ Jhon Robert Gregg は、テイラー式系統のオーデル式を独学で修得したが、ドイツ草書派のガベルスベルガー式、シュトルツェ式やフランス幾何派のスローン・デュプロワエ式を分析していたと、シモンズ F. A. Symonds は書いている。

グレッグは、アンダーソン Thomas Anderson の「速記の歴史」（1878）に挙げられた、次の 5 点の要求項目に共鳴した。<sup>17</sup>

【5 点の要求項目】

1. 速記の基礎符号には、独立形の母音符号が含まれている必要がある。この符号は、子音の画線に続け書きできるように適応させる必要がある。言い換えれば、一般的な基礎符号すべてに、特別で、特徴的な速記符号が必要であ

| Cross. 1878. |   |
|--------------|---|
| A            | ∪ |
| B            | ∩ |
| C            | ∪ |
| D            | ∩ |
| E            | ∪ |
| F            | ∩ |
| G            | ∪ |
| H            | ∩ |
| I            | ∪ |
| J            | ∩ |
| K            | ∪ |
| L            | ∩ |
| M            | ∪ |
| N            | ∩ |
| O            | ∪ |
| P            | ∩ |
| Q            | ∪ |
| R            | ∩ |
| S            | ∪ |
| T            | ∩ |
| U            | ∪ |
| V            | ∩ |
| W            | ∪ |
| X            | ∩ |
| Y            | ∪ |
| Z            | ∩ |

図 19 クロス式

る。

2. 速記符号はすべて勾配(slope)を持たせて書く必要がある。
3. 速記符号では、濃線符号と淡線符号を書き分けさせてはならない。すなわち濃線符号は使用しない。
4. 速記符号は中央の一段の行だけで書く必要がある。(上下段を使わない)
5. 速記の略語の規則は、確実で、包括的で、少数でなければならない。

#### 【グレッグ式立案の7点の基本要件】

グレッグは、以下の新方式立案の7つの基本要件を決めて、グレッグ式の理論体系を1888年に完成したとシモンズは解釈する。

1. 速記符号の書体は、楕円または楕円形、つまりラテン文字の筆記体の勾配を持つ形に基づいている必要がある。
2. 速記法は曲線運動を基礎としている必要がある。
3. 画線の自然な組み合わせから鈍角接合を排除する必要がある。
4. 速記符号を綴る場合、母音と子音とを接続する必要がある。
5. 速記符号に用いる画線は濃淡をなくす必要がある。
6. 速記符号の書き込みは、中心線に沿って一行だけを用いるようにする必要がある。
7. 全体として速記符号は一野線上に書かれる必要がある。つまり、書き込みは、直線上に連続的な流れで実行される必要がある。

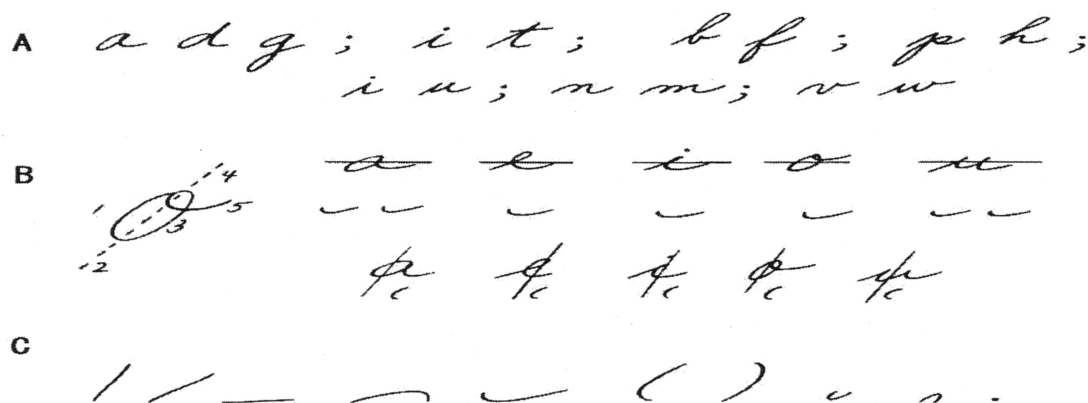


図21 グレッグ式における筆記体からの子音符号の生成

図21は、シモンズがグレッグの符号設定の根拠を示したもので、Aはラテン文字の自然な筆記体、BはQの書体をもとに[r]、[l]、[s]の符号をつくり出す根拠を説明し、Cではそうしてつくられた、[j]、[d]、[m]、[g]、[l]、[b]、[v]、[o]、[u]、[h]のアルファベットを挙げている。

イギリスの幾何派がぎごちない書線を呈しているのに比して、図 22 のデュプロワエ式のようにフランスの幾何派は円運動を巧みに採り入れて書きやすい速記線を実現している点に着目したグレッグは、円やフックの母音とラテン文字の筆記体の一部分を中心に割り当てた基礎符号を構成した。

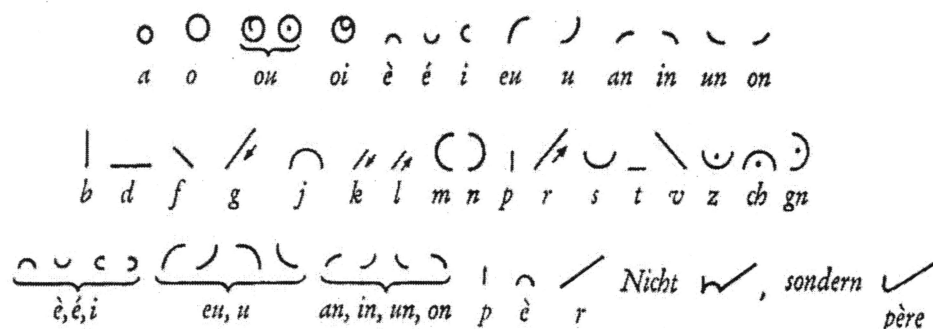


図 22 デュプロワエ式の母音がグレッグに影響した

F.A.Symonds: John Robert Gregg, p.48-49

一方、縦の線、右下向きの線は使用しないこととした。

さらに、秘書型の速記等で必要な句読点を加えたが、それは禁則とした右下向きの短線を用いた。

グレッグがねらったのは、幾何派の静態符号の問題点を動態符号の立場から解決しようとするもので、ドイツ草書派からは幾何派と草書派の中間的な流派という意味で半草書派と呼ばれている。

なお、日本ではドイツ流の方式を斜線派と呼んできたが、ドイツ学派はラテン文字筆記体の草書体から生成したことを理由に Kursiv 草書 と称することから、本稿では草書派と呼ぶ立場をとる。また、同様に日本ではグレッグ式を楕円派と呼んできたが、ドイツ学派はグレッグ式が幾何派と草書派のよさを調和させた創案の過程から半草書派 halb kursiv と分類しているので、半草書派と呼ぶ立場をとる。

こうして 20 世紀末まで、個人用の文字式と高速度型の符号式の速記が実用に供され、符号式では幾何派、草書派、そして半草書派の 3 派が高度に発展を遂げた。

20 世紀後半から、先進国が先行して、手書き速記の学習が低調になってきた。速記を用いない発言記録の作成技術が進歩してきたことや、高学歴化、豊かさが広がってきたことなどが背景にあるが、手書き速記は新たな時代に入ってきた。現実には、日本では就職資格でなくなって、手書き速記が衰退した。

世界的に見ると、一国だけだが、英国ではジャーナリストが国家資格をとる場合に、取材技能として速記が位置づけられ、ピットマン式の学習性を高めたティーライン式 Teeline

system が 1968 年、ピットマン式の速記教師、ヒル James Hill によって考案されて訓練されている。ただ、速記原本の第三者解読訓練は、行われていない。

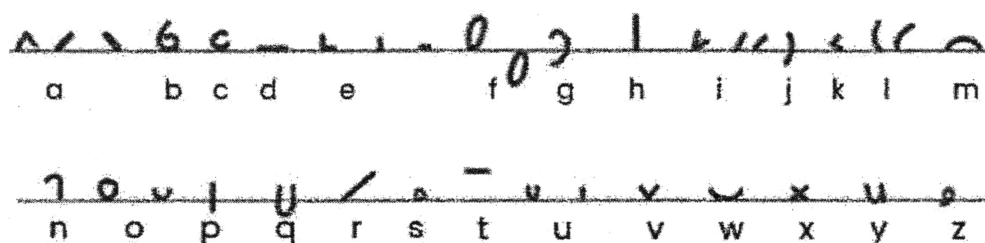


図 23 ティーライン式の基礎符号表 J.Hill,on WEB.

(まとめ)

国会会議録の作成に未完成の速記を採用し、発言ありのままの言葉で公式記録を作成するというプロジェクトは、金子堅太郎の英断で実行されて、速記は生命を得た。その舞台裏で、田鎖綱紀と弟子たちは欧州の速記事情を調べて、さまざまな速記の流派、方式があることを学んで、それらの長を採り入れることにつとめていた。

田鎖系衆議院式の単画化の偉業を成し遂げた西来路秀男は 1950 年、「現在日本には 80 数種の速記法式があるが、専門家用の高速度速記法として実用化されているのは、そのうちの 7~8 種にすぎない。それも名まえは同じ〇〇式でも、専門速記者用の符号としてほんとうに実用に供されているものは、創案者の符号とはまるで別ものといってもいいくらい実務者によって改良変形されている実情をよく知っておく必要がある」と衆議院標準速記法原理に書いている。

今日、主要方式において多様化した速記符号を知識体系として科学的に再構成する課題がある。

以上

#### 《注》

1. 西来路秀男：「衆議院標準速記法原理」、1950. 5. 15、衆友会、p. 23 には、「記音行為の結果、速記用紙に速記符号で書いたままのものをいう」と説明されている。西来路は元衆議院速記者養成所長、衆議院式の単画化を完成し、田鎖系で最多の速記者を養成した。
2. 西来路秀男：「衆議院標準速記法原理」、1950. 5. 15、衆友会、p. 23 には、「速記録は、完成作品（印刷・謄写または写字したもの、あるいは原文・原稿のままでも、それが速記録定本として確認されたもの）」と説明されている。
3. J. Bastiaan が NCRA 機関誌に投稿したもので、速記七十周年記念論集「速記研究と回顧」に小堀四郎（衆議院記録部）が翻訳して紹介したもの。1952. 9. 20、p. 61
4. ギリシャの速記様の略記法をヘーゲルでは話の速さに適応しないとして、速記ではない

とする。 F.Haeger、"Geschichte der Kursive", 1974、Wolfenbüttel、1.Von der Kursive zur Buchstabenschrift、1.3.Die griechische Schrift、p.10

5. イギリスの速記の起源をティルベリー・ジョンとする説は大勢が支持していない。向井征二「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史 II」、日本速記協会、東京、1973、p. 13

6. Sir I. Pitman: A History of Shorthand Fourth edition、London、p.39. コールズについて記述がある。ファウルマンによると、コールズはウィリス派とされている。

7. 向井征二：「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史 III」、日本速記協会、東京、1973、p. 19 にコールズについて記述があり、近代速記の萌芽を見るという。

8. 向井征二：「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史 III」、日本速記協会、東京、1973、pp.19. メーソン式について記述がある。

9. Sir Isaac Pitman: A History of Shorthand Fourth edition、London、Sir Isaac Pitman & Sons LTD、P.109 には、モートの四線譜を用いた別のアイデアの記述がある。

10. 西来路秀男：「速記入門ハンドブック」、ハンドブック社、東京、1955.11.15、p.17. ディケンズの記述がある。

11. 向井征二：「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史 VI」、日本速記協会、東京、1973、p.39. バイロム式から始まった符号生成の四分円ダイヤグラムズの記述がある。

12. 向井征二：「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史 VI」、日本速記協会、東京、1973、p.43. ドイツの Kursiv 草書派を完成した Gabelsberger 式の記述がある。

13. 衆議院速記者養成所月報 1951 年 3 月号の「百年前のアメリカにおける速記」(ジェームス・W・ビヤーズ著、武部良明翻訳)に「グラハム(グレイアム)氏は、アイザック・ピットマンの(中略)許可もなく、多くの頁を逐語的に一字一句正確にいれることを十分はかった」とある。

14. Andrew J. Graham がピットマン式を改良したグレイアム式は、基礎符号がピットマン式と同じである。出典：Sir Isaac Pitman: A History of Shorthand fourth edition、London、Sir Isaac Pitman and Sons L.T.D、p.253-254.

15. David Philip Lindsley が創案したリンズレー式の系統は不詳。Karl Faulmann : Historische Grammatik Der Stenographie, 1887、Wien、Verlag von Bermann & Altmann、p.146.

16. J.G. Cross がピットマン式系を改良した「折衷式」 Eclectic Shorthand. 幾何派に五線譜のような罫線用紙を用いる音表象法を導入し、高度な縮記、略記理論を構築した。中根式系の森卓明がその理論を導入して、太平洋戦争後「現代国語表象速記法」を完成した。

17. グレグ式の歴史をまとめた F. Addington Symonds のグレグの伝記 "John Robert Gregg", 1963、McGraw-Hill Book Company、N.Y.、p.48-49.

#### 《引用図版一覧》

図1 エジプト象形文字の速記化現象。加藤一朗：「象形文字入門」1970 年版から兼子次生作成。

- 図2 古代ギリシャのタキグラフィ Tachygraphy (略記法)。C.Johnen: "Allgemeine Geschichte der Kurzschrift", 1940, Berlin, p.15.
- 図3 古代表音文字とティロの速記の表音文字。兼子次生: 「速記概論」、1980.3.20、大阪早稲田速記専門学校、p.45-46。
- 図4 ティロの速記の構成、兼子次生『キケロと速記秘書、ティロ』、岩波書店、キケロ選集 12、2002.4、p.4.
- 図5 ブライト式の基礎符号 Bright、1588。A.Navarre: "Stenographie", p.82.
- 図6 ウイリス式 Willis、1602 の基礎符号。"Enciclopedia Italiana", p.702.
- 図7 ウイリス式の加點母音と用法、象形的略語の一部。F.Haeger: "Geschichte der Kurzschrift", 1974, p.22.
- 図8 シェルトン式 Shelton、1643 の基礎符号と表紙。A.Navarre, "Stenographie", Paris, p.85.
- 図9 「ピープスの日記」の最終ページ。H.Jochems 氏提供。
- 図10 モート式 Moat、1833 の母音表象法。A.Navarre: "Stenographie", Paris, p.77.
- 図11 ガーニー式 Gurney、1753 の基礎符号。A.Navarre: "Stenographie", Paris, p.106.
- 図12 幾何派(正円)の四分円と方角(方向・角度)図。Isaac Pitman: "Pitman's Shorthand Instructor New Era Edition", p.1.
- 図13 バイロム式 Byrom の基礎符号。A.Navarre, "Stenographie", Paris, p.121.
- 図14 テーラー式 Taylor の基礎符号。A.Navarre "Stenographie", Paris, p.121.
- 図15 最初の草書派ボードリー式(1) Bordley、1789、と、第2号のロー式(2) Roe 1802。  
出典: C.Johnen: "Allgemeine Geschichte der Kurzschrift", p.48.
- 図16 ガベルスベルガー式符号の変遷。(1)が F.X.Gabelsbeger、1834 式初版の基礎符号。  
C.Johnen: "Allgemeine Geschichte der Kurzschrift", p.82.
- 図17 ピットマン式系の基礎符号変遷。出典: Sir I.Pitman: "A History of Shorthand", p. 253-254. 図中の I.Pitman はアイザック・ピットマンが改訂したもの、B.Pitman は Isaac の末弟ベンの改訂(1855)、Graham(1858) グレイアムは日本語速記の誕生時に参照されたピットマン式の派生方式である。Sir I.Pitman: "A History of Shorthand", p.253-254.
- 図18 ピットマン式の変遷表。主なバージョンの符号文例であるが、④、⑤は創案者(Isaac Pitman 1813.1.4 - 1897.1.22.)の死後に後継者が変更したものである。発行所: Pitman Publishing Ltd, "An Outline History of Shorthand from 2400 B.C., As fast as Speech", p.21.
- 図19 クロス Cross 式の基礎符号は楕円符号源図(ダイヤグラムズ)を用い、二種線の採用で単画化を遂げた。Sir I.Pitman "A History of Shorthand Fourth edition", London, p.255
- 図20 クロス式の画線符号源図、J.G.Cross, "Eclectic Shorthand", 1890, Chicago, p.8.
- 図21 グレッグ式における筆記体からの子音符号の生成。F.Addington.Symonds: "John Robert Gregg", 1963, New York, A:p.51, B:p.56, C:p.49.
- 図22 デュプロワエ式の母音。F.Haeger: "Geschichte der Kurzschrift", 1974, Neubearbeitung, pp.38.



図 23 ティーライン式の基礎符号表。J.Hill、Tee-line system、1968、Wikipedia.

《参考文献》

- Albert Navarre (1906) “Stenographie”  
Fritz Haeger & Arthur Mentz(1997) “Geschichte der Kurzschrift”  
Christian Johnen (1940) “Allgemeine Geschite der Kurzschrift”  
Karl Faulmann(1887) “Historische Grammatik der Stenographie”  
Marcel et Rene Racine(1965) “La stenographie dans le monde”  
Franz Moser & Karl Erbach(1990) “Lebendige Kurzschrift geschichte”  
Olof Werling Melin(1927) “Stenografiens Historia”  
Sander-Karpenstein(1975) “Art und Bau der wichtigsten Kurzschriften”  
Isaac Pitman “A History of Shorthand Fourth edition”  
F.Addington Symonds(1963) “John Robert Gregg” McGraw-Hill Book Company  
向井征二 (1973) 『速記の歴史』、日本速記協会  
山口美知代 (2009) 『英語の改良を夢みたイギリス人たち』、開拓社  
近畿速記士連盟 (1952) 『速記・研究と回顧』  
武部良明 (1951～1956) 『国語速記史大要』(上下)、『国語速記概説』(上下)、衆友会  
森卓明 (1925) 『速記研究』  
兼子次生(1979、1980) 『速記概論』、『速記史』、大阪早稲田速記専門学校